大野城市歴史資料展示室　解説シート　民俗No.19

# 民具４（夏の民具―虫よけの道具―）

大野城市教育委員会

## 昔の大野城市の夏

『筑紫郡是』という書物に、明治35年午前10時に筑紫郡雑餉隈で計測された各月の気温の記録があります。この中の夏の時期をみると、当時は7～8月ともに15～16℃くらいで、最低気温は今よりも低かったことがわかります(現在は7月が18℃くらい、8月は23℃くらいです)。しかし扇風機やクーラーなどない時代は、夏はやはり暑い日々でした。そんな時期に体をこわさないように、加えて作物が無事に育つように祈る意味をこめて、たくさんの行事が行われました。雑餉隈地区の聖観音立像をまつる地域では、夏の病気をしないように「六月堂」という行事を行ない、牛頸・平野神社や白木原では「およど」という行事がありました。現在、六月堂は子どもたちの提灯行列になり、およどは夏祭りのスタイルをとったり(牛頸地区)、ワリ竹にろうそくをともすお祭り(白木原地区)として続けられています。

夏の年中行事(千灯明)の様子

## 昔の暮らしと虫

夏は虫が活発に動く時期でもあります。昔は蚊・ハエ・ゴキブリといった生活の害虫や、イナゴ・バッタ・ウンカ・ツマグロヨコバイ・ニカメイガ・ずい虫など農作物を荒らす害虫をいかに追い払って快適に暮らすかが重要な課題でしたが、１度に駆除する薬や機械がない昔は毎年人々の頭を悩ませていました。そこで、さまざまな道具が作られました。

## 虫をよける農具

**誘蛾灯（誘蛾燈）**　蛾の光に集まる習性を利用した道具です。受皿に水か石油を入れて夜の田んぼに設置し、真ん中に灯油の火をともすと、近付いた蛾が火に焼かれるか水に落ちる仕組みです。

街灯がなかった時代は私たちが思う以上に誘蛾灯の火が明るく、非常に効果が高かったと思われます。大正時代になると火の代わりに電球が、昭和時代には青色蛍光灯が使われるようになりました。

誘蛾灯

**油筒**　田んぼに直接油(石油・鯨の油・ぬかなど)を流す虫よけ方法に使う油入れです。稲の上の方にいる虫(主にウンカ)を手や葉つきの篠竹ではらい油の水面に落とすと、虫が死ぬという仕組みです。

**ブトフスベ**　「ブト」はこの地域の方言で、ブヨなどの小さな虫の総称です。農作業中これらの虫よけのため腰に提げたもので、草などを燃やすことを方言で「フスベル」といいましたのでこう呼ばれました。萱とフツ(この地域の方言でヨモギの意味)を縄状によりあわせ輪にして燃やしました。火は蚊取り線香のようにゆっくり燃えるので、長時間使えました。

**虫札**　人間の力が及ばないときは、神様の力を借りて虫を追い払おうとしました。これが虫をよけると信じられたお札「虫札」で、竹にはさんで田んぼの畔にさしました。ほとんど近所の有名な神社やお寺で祈祷をしてもらい頂いてくるもので、大野城市では太宰府天満宮のお札が多かったようです。また、毎年12月に行なわれた「くどばらい」(荒神まつりのこと。火の神・カマドの神である荒神様をまつる行事)のとき使われた御幣を虫札にする人もいたそうです。

(2004.3.31)

誘蛾灯（使用している様子）

虫札

ブトフスベ想像図

油筒